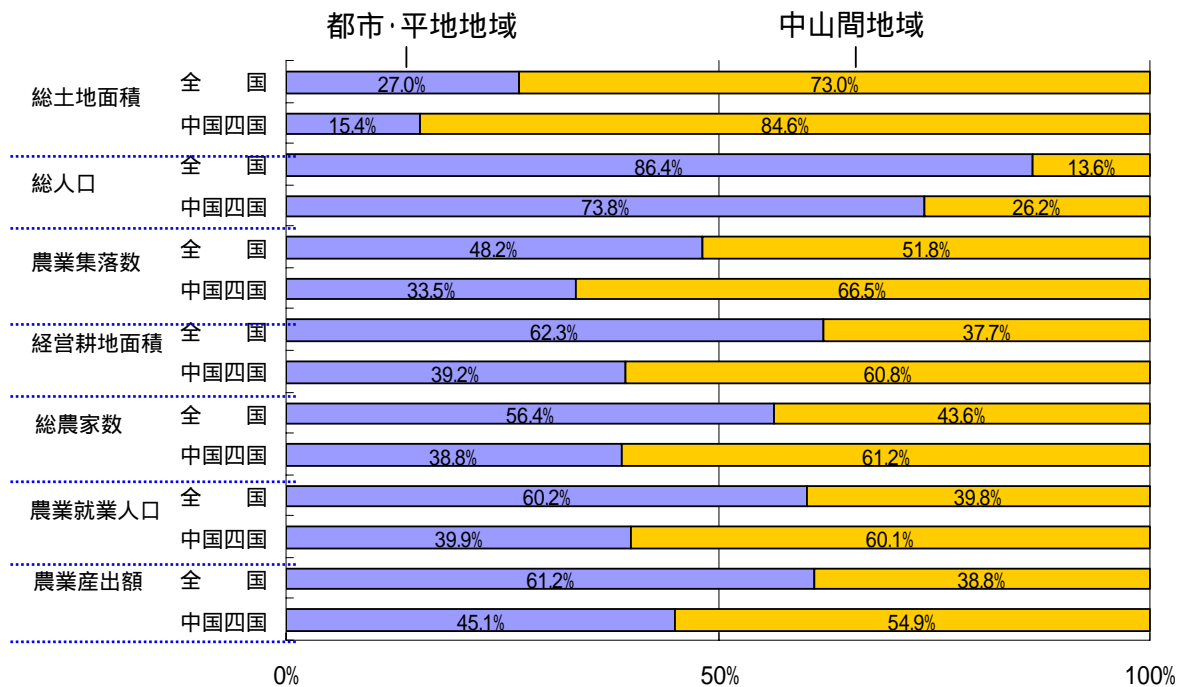


「平成 22 年度中国四国食料・農業・農村情勢報告」特集編の要旨

第 1 章 中国・四国地域の中山間地域について

- 中国・四国地域の中山間地域の農業に関する特徴（図・表 1）
 - 中国・四国地域においては、平野の外縁から山間に至る中山間地域（中間農業地域及び山間農業地域）の割合が、総土地面積、総人口において全国平均を上回っています。
 - また、中国・四国地域では、農業集落数、経営耕地面積、農業産出額等においても、中山間地域の占める比重が全国平均より高く、農業生産上重要な地域であるといえます。

図・表 1 中山間地域に係る主要指標（全国、中国・四国地域）



指標	全国				中国・四国地域			
	都市的地域及び平地農業地域		中間及び山間農業地域		都市的地域及び平地農業地域		中間及び山間農業地域	
総土地面積	10,030千ha	27.0%	27,141千ha	73.0%	780千ha	15.4%	4,290千ha	84.6%
総人口	110,358千人	86.4%	17,410千人	13.6%	8,679千人	73.8%	3,083千人	26.2%
農業集落数	67,165集落	48.2%	72,300集落	51.8%	10,314集落	33.5%	20,507集落	66.5%
経営耕地面積	2,088.9千ha	62.3%	1,264.7千ha	37.7%	105.8千ha	39.2%	164.0千ha	60.8%
総農家数	1,426.8千戸	56.4%	1,101.1千戸	43.6%	158.9千戸	38.8%	251.0千戸	61.2%
農業就業人口	1,569.2千人	60.2%	1,036.5千人	39.8%	146.7千人	39.9%	220.8千人	60.1%
農業産出額	5兆3,865億円	61.2%	3兆4,202億円	38.8%	3,873億円	45.1%	4,718億円	54.9%

資料：農林水産省「農林業センサス」、「世界農林業センサス」（組替集計）、「生産農業所得統計」、総務省「国勢調査」

注：総土地面積、経営耕地面積、総農家数、農業就業人口は 2010 年、その他の項目については 2005 年

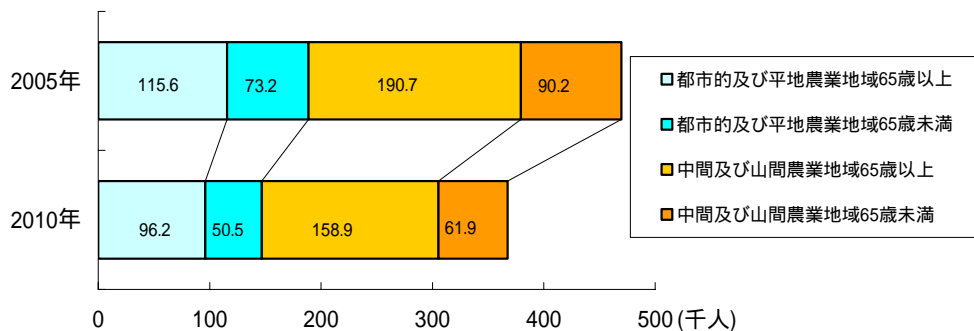
2 中国・四国地域における中山間地域の農村に関する特徴

- 中国・四国地域は、人口規模の異なる都市が適度に分散して位置する地域構造を形成しています。このため、生産地（農村）と消費地（都市）との距離が比較的近く、地産地消やグリーンツーリズム等により、生産者と消費者、都市と農村の間での密度の高い交流が可能な地域であるといえます。
- 中山間地域は、食料供給の場という役割に加え、二酸化炭素の吸収、バイオマス、多様な生物の生息の場、伝統文化の継承等の多面的機能を有しており、こうした面からも重要な位置を占めています。

3 中山間地域を取り巻く状況等

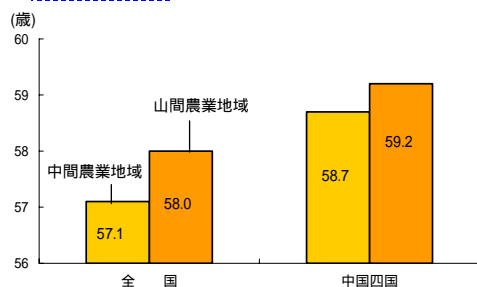
- 中国・四国地域の中山間地域では、農業就業人口の減少、高齢化、更に過疎化が進行しています（図2・3・4）。また、耕作放棄地も高い水準となっています（図5）。
- このような状況においても、2のような中山間地域の特徴を活かして活性化に取り組んでいる事例があります。

図2 中国・四国地域の中山間地域における農業就業人口の推移



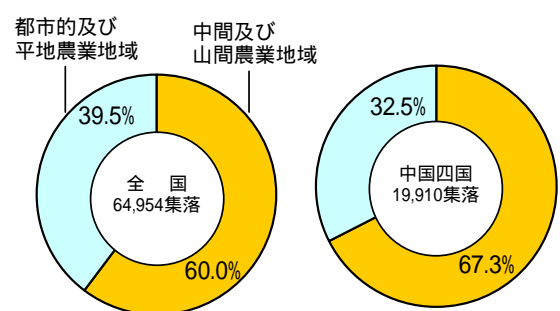
資料：農林水産省「農林業センサス」、「世界農林業センサス」（組替集計）

図3 地域類型別農業従事者の平均年齢（2005年）



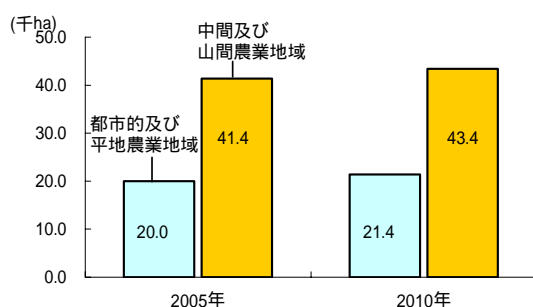
資料：農林水産省「農林業センサス」、「世界農林業センサス」（組替集計）

図4 過疎地域に占める中山間地域の割合



資料：総務省「過疎地域等における集落の状況に関する現状把握調査」（2011年4月公表）

図5 中国・四国地域の耕作放棄地面積推移



資料：農林水産省「農林業センサス」

第2章 中山間地域において活性化している地域の事例

1 事例分析の方法

中国・四国地域の中山間地域で活性化に取り組んでいる事例を収集し、その中から中国・四国地域の特徴を活かして、高齢化、過疎化等の厳しい現状を克服するべく取り組んでいる特徴的な事例を抽出して分析しました。

2 事例分析等

伝統芸能を活かした都市との交流

【事例1】NPO法人新田むらづくり運営委員会（鳥取県智頭町）

- ・大阪いずみ生協との体験交流をきっかけに、地域資源である「人形浄瑠璃芝居」に着目した取組を実施。
- ・「人形浄瑠璃の館」等のハード整備等に対する町等の支援を受けつつも、取組を進めていくなかで「自分達のことは自分達で」という意識が芽生え、集落としては日本初となるNPO法人格を取得し、NPO法人新田むらづくり運営委員会として全住民による運営を開始。
- ・都市農村交流の取組により交流人口が、Iターン家族の受入れにより集落の世帯戸数が、それぞれ増加。

地域農業を核とした多角的なビジネス

【事例2】(有)グリーンワーク（島根県出雲市）

- ・農業を核としつつ、経営の安定と地域貢献を目的とする農外事業を両立させるため、営農組合から有限会社化。
- ・農外事業については、行政や農協からの受託のほか、畦畔の草刈りのために導入した羊の毛を利用した製品の販売を行う等、多様な取組を実施。
- ・安定した経営により地域内にIターン者の雇用を生み出しているほか、「高齢者等外出支援サービス」により地域住民の福祉にも貢献。

Iターン者等の外部の力の導入と融和

【事例3】NPO法人結まーるプラス（島根県江津市）

- ・東京から島根県旧桜江町（現江津市）にIターンし、石見地域の食、自然、景観の素晴らしさについてインターネットを活用した情報発信を行っていたK氏と江津市職員（旧桜江町職員）が、市町村合併を契機として地域の将来に危機感を抱き、U・Iターン者等を含む地域内の有志とともにNPO法人を立ち上げ。
- ・地域資源を活かした田舎暮らしツアー等の「攻めの活動」や行政等と連携した空き家対策等の「守りの活動」を実施。
- ・田舎暮らしツアーに200人以上が参加し、約15人がIターンするとともに、空き家についても20件以上の住み替え契約が成立。

事業導入を契機とした取組の多角化

【事例4】境地区農業生産者組合（岡山県美咲町）

- ・2000年、中山間地域等直接支払制度の創設をきっかけに、集落において棚田保全等の取組を開始。
- ・その後、美咲町の職員からの提案により、「赤そば」の栽培を中心とした取組が本格化。
- ・同職員からの更なる提案により2003年に建設された「紅そば亭」は、1万人を集客するまでに成長。
- ・このようなそばを核とした取組の成果により、地域住民に自信が芽生え、都市部の大学生との交流による秋祭りの再興等へと取組が拡大。

住民と行政との協働活動

【事例5】仁保地域開発協議会（山口県山口市）

- ・急速な過疎化に伴う地域の将来に対する危機感の高まりから、地域の若い人が中心となり、地域内の全ての組織をまとめる仁保地域開発協議会を設立。
- ・「不便なところから整備していく」との方針の下、生活環境（道路等）の整備を実施。
- ・道の駅等の整備等に当たっては、住民自らが用地を確保。
- ・施設整備は行政、管理・運営は地域住民という役割分担の下で整備された道の駅「仁保の郷」は、年間約70万人が来訪する施設へ発展。

地域の資源（宝）の再生

【事例6】(株)四万十ドラマ（高知県四万十町）

- ・四万十地域は、古くから高品質な栗の産地であったが、輸入栗の増加や農家の高齢化等により生産量は大きく減少し、耕作放棄園も増加。他方、大粒で甘いという特徴から菓子製造業者等からの評価は高く、生産と需要のギャップが存在。
- ・(株)四万十ドラマが中心となって四万十栗の再生に係るボランティア組織を結成し、管理不良園の再生による生産拡大や同地域での一次加工による雇用の創出等を目的とした取組を実施。
- ・協議会の取組により生産者の栽培意欲が向上するとともに、地域内に栗の一次加工場ができたことにより雇用の場が創出。

- ・以上の事例では、危機感を持った人たちが、この地域を何とかしたいという思いから、地域に元々ある資源を見つめ直しています。また、取組の哲学（コンセプト）を関係者が共有し、活動へ向けた組織化を行うとともに、様々な技術等を取り込み、地域の活性化に結び付けています。
- ・これらの取組に共通する特徴として、「誰が（「人」）」、「何を（「資源」）」、「どのように（「仕掛け」）」という3つの視点が挙げられます。

「人」

取組の中心は「人」であり、人の和（輪）が取組の広がりとなります。活性化している地域には、この和（輪）を広げる役割を担う、あるいはその中心となるリーダーやキーパーソン（以下「リーダー等」という。）が存在しています。

リーダー等は、地域住民だけでなく、行政等の多様な主体が含まれており、取組のきっかけを作ったり、住民と行政等をつないだりと様々な役割を果たしています。

例えば、NPO 法人結まーるプラスでは、1 ターン者が中心となって組織を作り、そのメンバーの1人である市職員は、市とNPO 法人をつなぐ役割を果たし、1 ターン者を支えています。

「資源」

農村には、「資源」として目に見えるモノ（農産物、伝統芸能、景観等）も目に見えないモノ（農村文化、知恵等）もありますが、その価値が認識されていないことが少なくありません。分析した事例においては、「こんな良さ（新たな価値）があるのではないか」との“着眼点”から、目に見えるモノと目に見えないモノを掛け合わせるなど資源を“磨く”ことで新たな付加価値を生んでいます。

（株）四万十ドラマでは、大粒で甘いため市場からの評価は高いものの、生産量が大きく減少していた「四万十栗」に着目し、生産者、農協、菓子製造業者等と協力し、生産拡大や、加工施設整備により地域内経済の拡大を図っています。

「仕掛け」

人やモノ（資源）が揃っても、それらを上手く活かす「仕掛け」がなければ、取組は進みません。仕掛けには、人同士、モノ同士、人とモノをつなぐものなど多様ですが、「自分達はこうありたい」といった“コンセプト”やそれを達成するための手段としての“組織”が基本となります。

また、“知恵、技術”や、行政等からの支援を活用することで仕掛けの効果や持続性を高めていると考えられます。事例においては、核となる仕掛けは地域内で作り、必要に応じて外部の仕掛け（知恵、技術、助成）を取り込むことで、自主性や自立性を保っています。

例えば、（有）グリーンワークでは、有限会社化すること（＝仕掛け）により、森林公園の管理受託業務等の複数の農外部門への事業展開を可能としています。

第3章 中山間地域を元気にするためには

1 地域を元気にするためのポイント

前章において整理した「人」、「資源」、「仕掛け」といった3つの視点について、各事例の取組をより具体的なポイントとして整理しました。

【ポイント1】取組の中心となるリーダー等が存在

- ・多くの事例において、取組の様々な段階において企画・提案をする「企画型リーダー」や、活動主体と行政等とのパイプ役となり、取組が円滑に進むよう調整する「調整型リーダー」のように、タイプの違うリーダー等が複数存在し、互いの知恵・能力・特性を発揮・補完しながら地域を支えています。
- ・リーダーは、現状や将来への強い危機感を持っています。

【ポイント2】地域への愛情や誇りをリーダー等と地域住民が共有

- ・リーダー等の危機意識が地域住民へ伝わり、「この地域を何とかしたい」という地域への愛情や誇りが共有されていることが重要です。
- ・また、地域への愛情や誇りは、「ビジョンや理念」として取組の参加者間を結び、取組を成功させる重要な基礎となります。

【ポイント3】行政機関等の外部組織の活用

- ・地域住民だけでは解決できない調整や問題点については、行政機関、農協、教育機関等を活用することも必要です。
- ・ただし、外部の力を活用する場合においても、取組の主体はあくまで地域住民であるという原点を忘れないことが重要です。

【ポイント4】「資源」は見つけ出し、あるいは育てるもの

- ・身近にあるもの、地域では当たり前のものが、地域の魅力を伝える「資源」となります。
- ・視点や考え方を少し変えてみることにより、「資源」としての新たな価値や使い道を見い出すことができるものと考えられます。

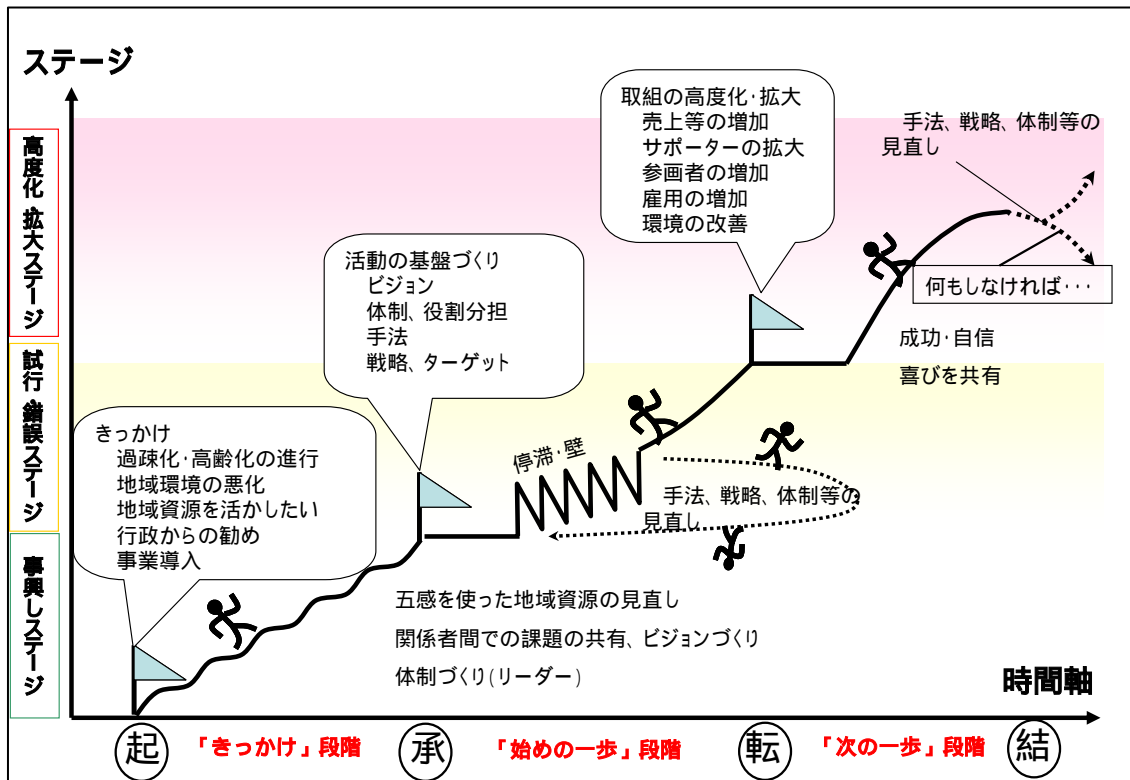
【ポイント5】人、経済、知恵、技術、情報呼び込む「仕掛け」

- ・強い思い（理念）やこだわりを持って地域の資源を磨き、これを提供あるいは情報発信することで、それに共感する地域内外の人とのネットワークが構築されます。
- ・特に、外部とのネットワークは、地域にはない人材、知恵、技術、情報といったエネルギーを地域に送り込み、物理・経済・心理面から地域を元気にします。

2 取組の深化

地域を元気にするための取組を時間の流れで捉えた場合、取組の「『きっかけ』段階」、具体的な取組への「『始めの一步』段階」、取組が拡大等する「『次の一步』段階」として整理することができます（図6）。

図6 取組のステップアップイメージ



（「きっかけ」段階）

内的・外的要因を「きっかけ」とした動き出しの段階です。具体的には、過疎化・高齢化の進行や耕作放棄地の増加等による地域環境の悪化、行政による事業の導入等により、リーダー等の「地域の将来に対する危機感」や「地域をもっと良くしたい」という地域への愛着や愛情が刺激され、リーダー等が持つ危機意識が地域住民に共有されます。

（「始めの一步」段階）

具体的な取組へ向けた準備を行い実行する段階です。
 具体的には、取組の基礎となる将来ビジョンや活動理念を定め、メンバー間の取組への方向性を一致させる、組織体制や各人の役割分担を定める、活動の手法、戦略等を検討し実行する段階です。
 ここで、取組の初期段階において想定していた効果が出ない等により活動が低調となることが少なくありません（停滞期）。
 このような場合は、「これまでの取組内容」について現状をあらためて認識し、「どうやれば乗り越えられるのか」という仮説を設定し、それを実現するための具体的な手法等を見直し、見直した結果を実行に移す、といったプロセスを根気強く続けることが有用と考えられます。

（「次の一步」段階）

「始めの一步」段階における停滞期を乗り越えることで、メンバーが成功の喜びを共有するとともに、自分達の取組に自信を持つことで取組内容が高度化し、あるいは拡大する段階です。
 この状況を維持し、更に発展させるためには、「始めの一步」段階同様、取組の手法、戦略、体制等について継続的に見直しを行うことがポイントとなります。